

〔新刊紹介〕

大平宏龍著

『日蓮遺文の思想的研究』

二〇二二年八月刊、東方出版、A5判、五〇四頁、定価八八〇〇円

株 橋 祐 史

本書は本篇・付篇・講演録の三部で構成されている。すなわち、本篇は、著者が日蓮教学思想について、一九七三年～二〇一九年までに諸方面に発表してきた一二篇の論文と新たな三篇の書き下ろしの論文、付篇は日蓮思想の実践に視点を置いた二篇の論攷、更に一九九二・二〇一二・二〇一七年に行われた三回の講演の記録とで一冊に編集されたものである。また読者の理解の便を考え事項索引も付けられている。

序文を見れば、著者が日蓮教学に関わる諸問題を見据え、日蓮遺文の思想説明のためにいかなる学問的態度で臨んだかを克明に披瀝されている。これは一人著者の研究方法論にとどまらず、現在の学問環境において日蓮の思想説明を目指す研究者にとって大きな示唆を与えている。すなわち、第一に日蓮親撰の遺文群に真摯に向き合うこと。日蓮思想の真意を説明することは日蓮の内面に迫ること、日蓮の内面の信仰と云う主体的把握を客観

的理論的に説明するためには根本資料の書誌学的・文献学的考察が最重要であることを指摘している。その上で先師の所説の根拠とした遺文を検討し採不採を決すること。また「門流教学」についても今一度確実な資料に照らして考察することの必要性等を論じている。

著者は日蓮教學思想研究にては「開目抄」・「本尊抄」の正確な理解が必須であるとするが、この開本両抄についても両抄を一通の御書とする関係性について従来の説を踏まえながらも、「開目抄」末尾近くの一節の文意と「本尊抄」の文意との一致が注意されねばならず、その点を考慮する時、「開目抄」と「本尊抄」の密接な関係がより一層鮮明に見えてくるのではないか（本書三四頁）との仮説を提起し、その上で「本尊抄」を最重要御書と位置づけ、その所詮を「本門八品、上行要付」とみてこれを根拠に本尊論・己心論・題目論・仏種論・末法下種論等教學史上未だ定説をみない諸問題に対して、それぞれ著者独自の新知見が仮説として吐露されているのである。中でも本尊論については従来の論争に終止符を打つものであって、画期的な新説として特筆されなければならぬ。

更に注目すべきは、日隆の著述にも触れられていない「小乗小仏要文」に書誌学的考察を加え系年について検討し、また「本門八品正意」・「本尊抄」との関連」という所説内容にまで論及したのは筆者以外類を見ないとである。

付篇では日蓮思想の論及から視点を変えて、法華経信仰の実践者としての「宮沢賢治」を取り上げ、類書にはみない独自の観点から法華経の宗教性を論じ法華経と賢治との関連性を結論づけた。また戦時体制下において日蓮門下が蒙った弾圧について、曼荼羅国神不敬事件に観点を置き、思想的背景あるいは当時の時代思潮に着目して事件の意義を論じ、特に重苦しい絶望的な裁判闘争の中にあつて当事者の精神的支柱であつたのは「日蓮教

学」への絶対信であることを克明に描き出している。これは後世の法華信者の眼鏡となるべきものである。

その上で講演録をみれば本篇・付篇にて詳述された所説が容易に理解し得るものとなっている。

以上の如く本書は周到な用意のもとに緻密な理論構築によって論述されており、正に日蓮教学思想研究の現在を知る格好の名著である。

さて「宗学は学問たり得るか」これは著者の日蓮思想解明研究の端緒であり、これが本書の根底にある。読み進めていくと、本書は全篇を通して著者の日蓮の教学思想の真意に肉迫するための研究史そのものであるとさえ思え、それが著者自身の実存をかけた真摯な研究姿勢であると共に、そこに著者の内面の信仰を見るのである。

故に本書は純粹な学術研究書でありながら、著者の「信仰告白書」とも言えよう。是非日蓮研究者以外の一般諸賢に一説を勧めたい。何故ならそこには現代を救う日蓮思想の真実があるからである。